

フレーベルの“人間の教育”の一考察（七）

野 崎 信 洋

はじめに

私が、再度フレーベルの著書「人間の教育」に関心をもつようになった動機は、もともと本学園に、すなわち昭和二五年三月駒沢幼稚園が認可設立され、さらに、二七年三月本学に保育者養成の施設ができ、かつ、終戦後一般社会にも幼児教育が隆昌となり、爾来全国的にフレーベルの存在が、教育思想の研究とともに改めて認識され、かつ、その研究熱が勃興し、さらに、昭和二四〇五・六年頃より全国的に幼児教育の場として、幼稚園の誕生が爆発的に増加し、その数全国に万余を数える施設が認可される現状となったのである。フレーベルの没後百周年記念として、世田谷区幼稚園協会の主催を始めとして、フレーベルを賛える行事が処々に行われ、私もその一員として大いに関与したのである。そこで、この機会に、世界幼児教育の創始者フレーベルの教育の原理を説いたものとされる著書「人間の教育」に触れ、その重要性は何であるかを模索し、

思惟し、そして、把握して、そして、今日の保育活動をどのように思考すべきかを、暫らく研究して見たいと思ったからである。しかし、その精神や活動内容が、一〇〇余年以前の幼児教育に対する考えが、今日直ちに、教育活動に具現しうるもののあるう筈はなく、しかし、専ら思想形成の内容にもっと触れてみたいと思ったのである。そこで、先刻も述べたように、終戦後の客観状況における幼児教育熱の高揚とともに、まず、小原国芳（人の教育）、岩崎次男訳（人間の教育）、荒井武訳（人間の教育）等を始め諸論文に接し学習につとめたのである。ところで、フレーベルの思想は、宗教的理念を土台として、真摯な教育思想家であるが、ただ、あまりに哲学的な表現であり、さらに、観念論的な表現の多いことも評され、円熟な思想家ではあるだろうが、難解な箇所が随所に散見されるのであって、ところが、私は教育や宗教を考えるとき、波多野精一のことばを想起する。すなわち、「宗教のない哲学も、哲学のない宗教もともなうそである。これが全人格の要求である」ということばである。また、ある学者は、「宗教は観念論ではいけない。実際でなければいけない」とも表

現するところにも深い意義を感じるのである。

さて、フレーベルの教育観も、こうした考え方であって、宗教、哲学そして教育という三つの思想を結合して、でき上った思想体系であるように考えられる。私は、とにかく、さきにも、本学紀要にフレーベルの「人間の教育」ということについてその一考察をしてきたのであるが、このたびも学内諸先生の指導をいただきながら、その概論的な内容の中に、多少なりとも、日々の教育活動における指針ともなれば、幸いと思つて、改めて考えて見ることにした。

フレーベルの宗教観について

さて、フレーベルは非常に多彩な学者であり、教育者であった。そして宗教をその根本的な理念として思想を生み、これを展開し、教育の問題を真面目に取り組んだ人柄でもあったと思う。私は、本学紀要創刊号に、「宗教教育の展開」として小論を述べた中に、フレーベルの基本的な宗教観、あるいは宗教教育というものと、類似や、相違について、さらに認識を深めたいことを一、二述べたのであった。

そこで、再度述べることになるが、フレーベルは生れながら家庭的にも、国家的にも、基督教的な宗教的風土の環境に育かれたものであり、自らの見方にも、考え方にも、人間意識のなかにも、宗教がその根底にあり、その学問的発想も、結局宗教的な結論を生み出していると考えられる。そこで「人間の教育」(下巻・第四章に) 幼児と両親と、生活的

体観ともいべき考えを述べて、「もし、幼児および両親が、一致した生活と心情を保ちながら成長してきたのであれば、このことは、それを沮み、妨げる新しい原因が、かれらのあいだに現われ、かれを分離してしまわないかぎり、確かに、少年時代全般を通じて、いや、さらにその後までも、すこしも損われずに維持されるであろう。——この一致は少年の年齢が進むにつれて、ますます強固になるし、ますます活気づくことであろう。——生命がそのもろもろの作用やあらわれにおいて、ひとつの全体として、その前に現われている。あの生き生きとした心情の一致や、明瞭な精神の一致こそが、真の宗教心の揺ぎない土台であり、基礎なのであって、——外面的にのみ生活を共にしているというようなことは、決して、かかる土台や基礎になるものではない」として、生命のはたらきと現象とが、一つの統一的全体として生き生きとした心情が、人間交流の密着した環境的現象の大切さを先ず家庭に求め、純粹な心情を抱くことによつて、宗教生活の発現があることを物語っているのだと考える。文中「一つの全体」という表現はこの場合極めて重要な意味があり、フレーベルの基本思想の一面を表わしていると私は考えている。

そこで、宗教は環境から学びとるといわれるように、フレーベルは、神と人の関係をより深くして、やがては、人間生命の充実といった意識を学びとらせようとして宗教教育を家庭生活に求め、これを発展さすように考えたのではなかったか。ところが、また次のようなことばを述べて純粹性の困難を指摘している。「たとえ宗教そのものが、きわめて單純なものであり、人間の本質そのものに内在し、人間と一体をなしているもので

はあっても、宗教の本質を認識し、洞察することは、ごく稀であり、その純粹なものは、きわめて困難である」と、あるいはまた、「人間が人間であるからこそ、宗教的感情や感覚が、思想が、人間の心情や精神から、したがってまた、両親との精神的一致のなかで成長し、自己をまた失っていない少年から湧きでるし、芽生えてくるのである」と述べて、宗教教育の基本的な理念の発想から、思考した思想内容として見なければならぬ。前述の内容も、単なる外見的生活の共同体としていくのではなく、親子一体となつての家庭の集合体が、宗教心を身につけた上での宗教教育であるべきことを志向しているのではないかと考へるのである。

さらに、フレーベルの「人間の教育」に「宗教および宗教教育について」――「知覚された独自の精神的な自己がないし人間の精神が、もともと神と一つのものであつたという予感を明確な意識に高めるようにする努力、および、この意識に基づいて神と合一しようとする努力、さらにこの神との合一の中で、生活のそれぞれの状況や関係を清くかつ強く生きぬいていこうとする努力これが宗教である」と述べ、「宗教は努力である。永遠に進展し続ける努力であり、この努力を通じてこそ永遠に存続し続けるものなのである」と、このようにも説いている。そこで諸学者の表現のかたちは異なるが、宗教は精神的自我とも、自己とも訳し、自分というものを深くして、宗教的な反省、宗教的な努力、宗教的な覚醒の重要性をその根本におき、この宗教教育の展開を試みていることは、極めて意義のある考えといわねばならないだろう。宗教の本質は自己の覚醒にあることは、仏教も基督教も真剣に取り組んでいることであつて、

神の本質、仏の本質、これは絶対に二者異つた存在者であり、宗教者であるとは理解せねばならない。ただフレーベルの宗教的な思想の表現には、仏教的な宗教観と、通じあうと考へられる諸点を理解することができると思われるので、すなわち、それは体験であり、努力であり、これを存続することであり、行い持ち続けることである。「精神的な自己、すなわち魂や精神や心情は、神のなかに安らうものであり、従つて神の制約をうけるものであり、神から生じてくるものである」と述べて、このよ
うな精神的現象の本質は、むしろ神によって制約されることを認識させ、そして、神というものの本質や作用を洞察させたいという願ひは、高度な宗教教育と考へたのではなかつたか。さらに、「知覚、刺激、確立、啓発すること」(岩波文庫一八六頁、上)とも表現していることは、「宗教の世界にあつては、人間はむしろ受動的なものである」ともいわれるように、人間の精神面においてどこかに神とか、仏とかという偉大な尊い存在者から、いろいろと与えられるものである。普通人は模倣のできな
い大きな力をもつた覚者といわれる存在者から、私たち個人はどのような真理を体得しうるか、ということになると、一朝にして体験的に学習することは容易ではない。おのれ自身が空うして、そしてこれを静かに聞くとか、体験することによつて得られるものであることはいうまでもない。道元禪師は、正法眼蔵光明の巻に、「生死去来は光明の去来なり、ただ身をも心をもはなちわすれて、仏の家になげいれて仏のかたよりおこなわれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれずこころもつひやさずして、生死をはなれ仏となるなり」とこのように宗教的体験の真

理を示されておられるように思うのである。基督の啓示ということばもまた、人間の理性や思惟をこえたものであるともいわれるのである。このように、自分というものをみつめて、人間として高いものを求めようとしているが、逆に人間は退化していこうとしている一面もある。そこで私たちは、宗教ということを考えるにあたって、偉大な宗教者の体験的な内容より発せられた、深い真理に耳を傾けることなく、自己自身退化するに至ってはならないと思う。

さて、フレーベルは、宗教的信仰を立て前として自己を追求し、自己の覚醒に努力しようとしたのであった。そしてこれがどのように人間として宗教的な美しい活動がなされるかを、人間の教育の命題としたのではなかったかと思う。

これを要するに、フレーベルは、宗教教育の基本的な理念の発想から、思考した内容と見るべきであろうし、そしてそれは単なる外見的の共同体としてゆくのではなく、やはり親子一体ともいべき最小限の家庭の集合体が、宗教心を身につけた上での宗教教育ではなかったかと思う。この家庭における宗教教育を行うということは、「真の宗教心のゆるぎなき土台であり、基礎である」と強調して宗教心の発展を冀っていたのであろう。あるいはまた、常に人間教育の根本は、人間そのものを思惟の対象としたことは、たびたび触れてきたところであるが、自己とか、自己自身とか、自分たちといて、あるいは自己を通じていうことは、人間中心の努力目標として、人間向上、人間の充実という自分というものの重みを自覚反省した自己自身を通じて、純粋な人間性をうち出そうとし

て、先ず、自分の息子を通じて宗教心を達しようとしたとも考えられるのである。それは自分を鍛え、宗教的な雰囲気によって「最も内奥にある生命の形成発達の明瞭にして確実な諸経験を自分の息子に伝える」という考え方をうちだしていったものと思う。それはフレーベルは、常に言うているように、幼児、児童は、「たとえそれが自分の外的経験に異質なものであっても、自分の内心でその正しいこと、真なることを証明しつつ——未だ濁っていない、弱っていない青少年の力を、青少年の新鮮さをもつて」と述べて、幼児、児童の純粋性を信じ、幼児、児童は神の似姿であるともいう考えを、特にもっていたのであろう。幼児期において「外的なものを内面化する」として、いかなる学問も直接間接その大小のいかんをとわず、経験活動は、人間自身の進歩向上を通じて向けられる、対象はやはり人間そのものである。「人間こそ人間自身の究極の目的だからである」とはカントのことばであるが、もし、自己自身の認知とか、自己自身への注意とか、自己自身の人格を偽り装う人とか、いうことの真面目を欠くことになると、人間教育の乱れとなり、自己の向上発展を書ることになるといふのである。学問の目標は人間追求にあることは言うまでもないが、ここに想起することのことばがある。それは、前学長小川弘貫博士の提唱である。すなわち「人が人である」と題した十数回に亘るの講義である。もちろん、同博士の宗乘的言語表現であるから、門外漢の私には到底理解が困難であり、それにフレーベルの自己追求の掘り下げ方については異なるであろうが、例えば、「人が人である」ということばを始め、「世はこれすなわち自己の本体なりとか、人が人とし

て活動していることが」、とか、正念すること即ち人間が真人間の姿においてすることとか、人の人を見るなりとか、山の山を見るなりとか、人を使えながらも自分でやることを教えるとか、自己の自己にあるとか、模索および自己をなろうとか、自己を忘るる、自己を証する、自己を脱落と展開されていること等の文章中の表現ははかり知れない程自己についての哲学である。或は道元禅師は、「仏道をなろうというのは、自己をなろうなり」とも表現されているように、これはいわゆる仏教の人間像について、自己形成の真実内面を示されたものであろう。眼蔵的な捉え方をして、そこには所得心についての用心と、人間正道の工夫を示しておられるものと考えるのである。

さて、フレーベルの「人間の教育」にも一貫して語り続けてきたところの、人間の生命とは何か、人はどうして生きていかなければならないか、現在生きていることの存在の価値、或は、どのようにして生きて行ったならばよいのか、自分というものに気づかせ、すなわち自分を発見する力をもっている人間であるという力強く、たくましい人間として自覚させることが大切であり、正しく安心して生活の出来る人間像を、自ら形成発展することに、心を砕いていったものと思う。長田新博士の「フレーベルに還れ」に、「人間の教育の仕事は個々特殊な方法以上の何ものかによって生命化されなくてはならない」といえ、教育活動というものは、生命化することの深い意義を感得し、さらに教育作業の内容を反省することが要求されることになる。フレーベルは、「われわれ教育者の一つ一つの仕事に生命と魂とを賦与せずにはおかない」といい、「教育すること

の冷厳な場として、子どもの前に立つべきである。そして愛と敬をもった仕事でなくてはならない」と結んでいる。

これを要するに、人を育て、宗教心をどのように育成するかということにあるので、真の自己というものをしっかり確立しなければならぬ。このようなことを繰り返し強調していった。「宗教教育入門」に「宗教は子どもに何を与えなければならぬか」とか、「宗教は、人格の発達にどのように影響するか」ではなくて、「人格の発達はこどもが自分でもつ宗教にどのように影響するか」或は、「子どもが自身の宗教を築くことは、いかにして可能であろうか、子ども自身の宗教を形成することに、どのように理解できるか」と述べているのであるが、やはり学問も現実も所詮どこまでも人間中心に考え、自己発見に資する内省の重要性を説き示していると思う。

さて、フレーベルの出生時代は多くの思想家が輩出して、精神的風土を生み、その影響を受けながら互いに、新鮮な思想を摂取し、そして発展して行ったこと、これは周知のことであるが、その多くの思想家の説く哲学的内容は、いかにも人間主義的な風土の高まりを生じつつ開花して行ったのである。ニーチェの「人と思想の序文」に次のことばが印象的である。「日本の人の心は、がらんとして吹きざらした空間に人間は元来あるものだということを、はじめて痛いほど感じ、それに驚くとともに、人間はこういう空間に投げださせることこそが本来なのだということをいまさら悟った。人間にとって本来であることによって、それは人間に共通な世界的なことである。そして、西欧の幾多の思想家が、苦しみな

がら、問題としたこと——人間であることの自覚をもって、そのなかに、人間の生きうる可能性を探求した」と手塚富雄は、ニーチェの人間の生き方に感じて、上記のように述べ強力な生への意志を説かんとしている。

そして、彼は「神は死セリ」といって人間の生き方が露骨になり、人間であることの自覚をもって、そのなかに人間の生きうる可能性を探求しようとしていたニーチェに感動しているのである。「人間の教育とは人間の生命の教育ということではなくてはならない」といわれ、あるいは、長田新博士の「フレーベルに還れ」に次のことばがある。「その生命にかえてわれわれ人間存在の無意識裡に自己の姿をひめている」として、その秘めている自己をどのようにうち出せるか、あるいは、引き出させるようにするかを考え導くことが教育の実践と方針になるのであろう。

さらに、フレーベルは、人性についてもいろいろと思想の展開を試み、「幼児および少年の、人間的な本性や人間的な本質に適した指導と教育が、行われるところはより美しく、より豊かに、そして生き生きとした姿となってくるところに人間の祝福となってくる」と述べて、さらに人間の性の善なることものをべている。「なるほど人間の本質自体は善であり、人間自体には善なる性質と善なる志向とが存在するが、もし有限なもの、身体的なもの、うつろいゆくもの、肉体的なもの自体も、その性質や結果も——確固たる根拠とその存在をもってのもの、すなわち、害悪なもの、欠点のあるものでないというのではないなら、肉体的なものや、それから必然的なものに結果してくるものを、間違ったものとしなければ、人間は善良で、有能で、徳深い人となるためには間違いを犯すこ

とも避けえないということ、真に自由となるためには、自分を奴隷にするも避けえないということ、それ自体害悪なもの、間違ったものと名づけようとしなければ、決して人間の本性上悪いものでないし、まして人間の生まれつきの害悪な性質などというものは存在しない」とこのようにまわりくどくどくといて本性を悪ときめつけようとすることは、教育するものの心にどこか己に、別の眼鏡をもって見ることになるので、つまり先入感となるので、むしろ悪として見るばかりでなく、軽蔑さえすることになる。

さらに、「人間は本性上、すなわち人間、それ自身善でもなければ悪でもないなどといわれるならば、それは明らかに人間性に対する裏切りである」と述べて、「神を真に認識する手段と方法とを否定し、あらゆる悪の唯一の根源たる嘘を作り出している」と、このように言って生れつき害悪な性質などというものはないのに、悪といわれる悪があるというならば、それは嘘であるといつて、「嘘は悪のはじまりである」ともいい、フレーベルは嘘というものはそれ自体存在しないとして、「嘘」という行為を否定しているのである。人間は真実を語るようにつくられているというのである。それはさらに、人は神によって真実を語るためにつくられているというのである。この思想については、私、前紀要に述べたように、中国の古い思想である「信」という文字がそのことを説明しているのと類似の解釈である。しかし現実の人間生活において、特に、幼児の精神生活において、年齢的には早やくも2歳1カ月頃から「嘘」を発するようになるといわれるが、これは遊びの色彩として発生する現象

であるから、心理学的には、それ程なこととしてはいい。しかし一つは年齢的段階によっては自己を有利に展開防禦せんとする思考発達上の問題として考えるや否やは別として、後日にゆずらねばならない。われわれ日頃の生活において大小の嘘言を発するのは日常茶飯事であろうこのことは、フレーベルの「人間の教育」の上に立った宗教的、哲学的問題内容として捉えているものと考えられる。フレーベルのいう「人間によって行われるあらゆる欠点、いわば人間にまつわりつき、嘘飾の衣服のように人間を包みこんでいるあらゆる欠点悪は、人間の成長とともに生じてくる人間の性向と人間の中に不変的な存在をする、人間の本質という。人間の二側面の関係の混乱だけからおこってくるものである」と繰り返し人間の中にはもともとある悪に対してではなく習慣に対する戦いが、たとい辛苦を極める戦いであっても、人間の本質的なよい面が表われ、正義を欲する人間の考えとして、悪は消滅するといっているのである。現今の一般社会の風潮を顧みるに、非人間的なしかも動物化された人間活動の実態行動を見るにいたっては、まことに悲しむべきことであり、また、いましむべきことではないか。しかし、嘘言の妥当性を主張する人間こそ、明晰な人として賛えられている傾向もある。すなわち人間文化が向上と並行して人間自身の価値が低下し、嘘言の蔓延となり、人間世界はそのままやがて凝結の状態となるであろう。フレーベルを始め多くの思想家たちが、人間教育の思索に黙考したと考えられる学問風景の一つは、独逸の国の当時は、戦乱の影響を受けて、人心は乱れ行政には欠陥を生じた結果、むしろ人間と生命を考えさせ、そして教育を思考したの

ではないかと想像せざるをえない。「本来子どもらしい、真に敬虔な心、真に宗教的な心は、現在幼児および少年の世界において殆ど全く支配していない」と述べ、さらに、ことばを次いで、これに反して「たくさんの利己心、不親切、特に粗野等々が幼児および少年の世界で支配している」ということは決して否むことのできない事実である」とこのように当時の世相が反映して世の中の混乱もあって、実際の教育作業の困難さを如実に物語っているように思う。

むしろ人間関係において、物においても、真の子どもらしさとか、信頼心とか、愛情をもつ敬虔な心とか、融和の精神とか、仲間や同胞に対するいたわり等、尊敬の念がなければ、美しい人間の共同感情など養われることができないであろう。このようなことが円満にして順調に行われるならば、家族生活も、人間生活もそして宗教生活とも順調に発展されることはあきらかであると思う。

さて、最前にも述べたように、人間性が善であると考えるフレーベルの思想は、人間自身善なる性質と善なる志向が存在するという考え方に對して、山崎次男はフレーベルの「人間の教育」の中に次のようにその見解を示している。「既成基督教会の原罪的人間観と対立する。」彼はこのことを意識しつつあるかのごとく次のように主張する。「時間的なもの、個別的なもの、したがって有限なもの——そのことによって神の被造物、神によって生成されたもの、自然それ自体を軽蔑することになる。彼は本来の意味において神を冒瀆している」云云といい、「原罪的人間観をもった(有害な教育者)につくりだされる。——フレーベルは、

(罪のない人間及びかかる子どもをばじとして罪ある者にする)者、(子どもを精神的に打ち殺し、子どもの生命をうばいさる)者」としてきびしく告発するといつて原罪人を否定して性の善なることを主張するフレイベルは、従来の基督教的習慣や考え方の異なることについては独り浪漫派と名づけられているゆえんであろう。とにかくフレイベルは「人間、すなわち幼児や少年を最初に悪くするのは大抵人間、すなわち幼児でない人間、大人であり、しばしば教育する人間自身ですらある。子どもを精神的に打ち殺し、子どもの生命を奪いさる」者として、告発しているようである。そこで、フレイベルは人間の性善論者ということになる。そして、人間神性論とか、児童神性論といわれるように、人間の本質も神的なるものあり、本来的に原罪者とは見ないのであろう。

さて、そこで、このような基本的な思想をもって人間の教育を思考し続けたのであろう。そもそも「教育は子どもの内面に働きかける営みである」といいこの営みの中に生命を与え、自分を覚醒させ神の心を知らせようとしての形成手段を宗教教育に具現しようとしたのである。フレイベルの宗教観や幼児教育観は、当時の思想家に触れる最良の機会でもあり、常識とされていたいわゆる風景でもあったようである。前にも述べたことであるが、フレイベルの思索時代は、独逸の理想主義哲学の最高潮期であったといわれ、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルという三大思想家の外にフレイベルはシェリングの主張やヘーゲルの思想を摂取し、「人間教育」の中で精神と自然、生命と自覚、このような思想を同化し、万物は神によって見えだそうとする思想を宗教に求め、精神観を自己の

本質、自己の神性、自己の本分等を自己の生活の中に実現し、活動させてゆこうとしたようである。そしてこれらを推し進めると「宗教的自我」になるという完成心を人間の使命としたのであろう。「神を信ずることとはわれを信ずることに外ならない」とは神学の宗教教育論であったが、それは同じ宗教教育といっても、仏教の宗教教育では、各宗派別の教育が行われるのが当然とされている。フレイベルの宗教教育論は細かく宗派的宗教教育を論じてはいないようである、大きく人間を教育するにはその土台を宗教教育におくという考えで、その方法手段はフレイベル独特の方法であるらしく、旧来行われていった雰囲気と異ったことも浪漫派として別視されたものようである。人性の善悪についても原罪人間として生れたということは極めて大きな問題であらう。神をたて、絶対者としてこれを信じ、一步も近づくことのできないような差別観をもったものが信仰の対象である。しかし神人同根とか人間はもと神族とか、人間は神の子として考えるならば、人間ひとしく神性をもった人間そのものであり、原罪人として扱ふこと勿れ、ということにならう。しかしその考えは基督教としては許されないのであろう。仏教は人間本来仏としてみる。自己を拝む心を養う、自己自身を一つの対象として考える。そこでこれを自覚しないならば、自己自身の仏性観に気づかないことになるので一層の研究工夫が求められる。ルソウの言葉にも「人生のそれぞれの時期、それぞれの状態には、それにふさわしい完成があり、それに固有の成熟のあり方がある」と成童の考えをのべている。ということは、ピアジェも言を極めていっているようにその時期における人間の教育の重要性を

主張していることと併せて、「一つの完成」ということばの内容にも傾聴すべき創造があると思う。フレーベルは、「児童のうちに未来の種子が秘められている」といったことは教育学の主体的な考えであって、その種子は神性と解して幼児、児童を畏敬したのである、ともいわれ幼児教育が人間教育の根本であると主張して止まらなかったようである。

むすび

フレーベルは、何故に教育の問題を終生の仕事として創造し思考したのか。もちろん、ペスタロッチの深い信頼の下に培われた人間教育の指導助言を与えられてからは、一層教育者として決心したことは周知の通りである。

さらに、考えられていることは、十八世紀の哲学の時代は、特に、教育上児童の自己活動を重んずる傾向にあったといわれている。それにライプニッツの单子論に培われ、その後、教育思想を一般に支配したということであり、この傾向はフレーベルにいたっては徹底した観があったともいわれている。やがて教育と宗教の問題をひっさげて、七五年の生涯を終わるまで、幼児教育を中心とした人間の教育を創造発展させ、フレーベル独特の教育学を完成したともいうことができると思う。フレーベルが常に教育の主題として考えたことは、幼児、児童を中心とした教育であり、宗教と結合した教育であり、しかもそこには人間初期の生活をもつ教育的意味を主張した学者は、コメニウス、ジャンポール、ペスタロッチ、そ

してフレーベルであった。中にもフレーベルは最も徹した学者であったといわれている。人間の創造発展の姿は、誕生したばかりの嬰兒においているところに、フレーベルの教育学の独自性があるともいわれている。私の、このたびの研究は、まことに断片的で貧しいもので、充分に意を尽しえない研究レポートとして述べ、多少なりとも、自分自身の幼児教育に対する経験を増進し、研究資料としてこれを考えてゆきたいと思う。なお、文末ながら、諸学者の研究に敬意と感謝の念をささげてこの稿を閉じる。

参考文献

- 一 人間の教育 岩波文庫(上、下)
- 二 人間の教育(上、下) 明治図書出版
- 三 人の教育 玉川大学出版
- 四 フレーベル人間の教育 有斐閣新書
- 五 教育思想史 有斐閣新書
- 六 神・人間及び人間の幸福に関する短論文 岩波文庫
- 七 世界の名著ニ―チエ 中央公論社
- 八 宗教論 創文社
- 九 宗教教育入門 玉川大学出版
- 一〇 宗教教育論 玉川大学出版
- 一一 禅の人生観 増永靈鳳著
- 一二 宗教教育の真諦 広文堂出版
- 一三 宗学研究論集 曹洞宗宗学研究所
- 一四 ルソー(エミール入門) 有斐閣新書

以上